

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：35404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04701

研究課題名(和文) 国際理解教育における難民問題と市民性形成 欧州の協働実践に学ぶ教材開発

研究課題名(英文) Refugee Issues and Citizenship education in Education for International Understanding; Development of teaching materials based on European collaborative practices

研究代表者

横田 和子 (YOKOTA, Kazuko)

広島修道大学・国際コミュニティ学部・講師

研究者番号：80434249

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では、国際理解教育における難民問題学習への創造的なアプローチを求めた教材開発を検討、そのためのワークショップ、フィールドワークなどを継続的に実施した。教材開発過程では、語り、アート、絵本、地域コミュニティでの関係性などの視点から難民問題学習にアプローチし、説教臭さを抑えながら普段難民問題に縁遠い学習者にも働きかけることを目指したが、当事者性の問題は根深く、また実践を行うにあたって課題もあった。地球規模課題と向き合うためのベースとなる、コミュニティや個人の新たな連帯の可能性をもたらす国際理解教育のあり方を、今後も検討していく必要があることが浮き彫りになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題のキーワードは「自分ごと」「当事者性」であり、難民問題を、遠いどこかで起こっていること、誰かが解決してくれること、から、一步でも自分(ごと)に近づけるための手法を模索した。他人事になりがちな課題だからこそ、学習者にとって参加しやすいきっかけづくりを意識し、身の回りのリソースを活用し、難民と市民の<あいだ>を揺さぶり、学習者の認識だけでなく、価値観や情動に働きかけることを検討した。その上で、最終的な研究成果報告書『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』をウェブサイトに掲載した。<https://kokusairikai.wixsite.com/nanminstudy>

研究成果の概要(英文)：We examined the development of teaching materials in search of creative approaches to learning about refugee issues in Education for international understanding, and continued to conduct workshops and fieldwork for this purpose. In the process of developing teaching materials, we approached learning about refugee issues from the perspectives of narrative, art, picture books, and relationships in the local community, and aimed to reach out to learners who are usually distant from refugee issues without sounding preachy, but the issue of performer/holder was deep-rooted, and there were challenges in implementing the practice. It has become clear that we need to continue to examine the role of education for international understanding as a basis for confronting global issues and for creating new possibilities of solidarity between communities and individuals.

研究分野：国際理解教育

キーワード：難民 市民性 当事者性 国際理解教育 教材 アート 絵本 コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

国際理解教育は第二次世界大戦以降、平和と共生の社会構築を目的に生まれたが、難民問題に対しては依然有効な手立てを見いだせていないのが現状であり、日本の国際理解教育も同様である。本課題の企画中に、国連難民サミットや、リオ五輪での「難民選手団」のアピールもあったが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックのホスト国たる日本で難民問題を他人事にはさせておかない、という社会的な機運を高め、解決に向けた協働に参加する市民意識の活性化を目指す必要があると考えた。

国内での難民問題はかつてインドシナ難民問題を契機として認知され、以降社会教育の場や学校教育の現場においてもその理解と支援が取り組まれ、また教材も開発されてきた。また国際機関やNGO、政府・個人などが果たしてきた役割は、教育にも一定の影響を与えてきた。しかしながら難民問題学習においては系統性や持続性、当事者性の点などの課題が未解決のままであり、学習者がたとえ難民問題に触れたとしても、一過性の学び、あるいは「きれいごと」を述べるに終始してしまうという問題が未解決のままである。こうした課題を脱却するためのアプローチを検討したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、難民問題が地球的課題として深刻化するなか、この問題の解決に資する市民性の形成に必要な学校内外における教育の内容・方法・理念を国際理解教育の観点から明らかにすることである。日本との比較も前提に主要な難民受け入れ国で「難民問題の傍観者から支援者へと変容した人々」への聞き取りを行い、支援者になるために、あるいは支援者であり続けるために必要な資質・技能・態度を習得した場面、きっかけ、背景などをナラティブに明らかにしていく。調査の際、環境・条件など社会制度の側面は別途整理し、日本における変容に必要な諸条件を浮かび上がらせる。そして調査結果をもとに教材・学習プログラムの開発を行い、国際理解教育を通してこの問題解決にアプローチするための方策を提示する。

3. 研究の方法

本研究の遂行のため、難民の受け入れ機関や支援機関、難民問題を扱う団体や教育機関の訪問調査を行った。聞き取り調査対象の選定にあたっては、難民支援を「意図していなかったのにならいつの間にか支援に巻き込まれた」個人・企業・団体の存在に特に着目し、傍観者から支援者へと変容するに至った背景、支援者でありつづけるために必要な資質や技能、態度、リソース、エンパワメントを中心に文献調査と聞き取り調査を行った。海外調査では、大虐殺から変容したルワンダ、そして難民政策で揺れるドイツ、ポーランドを訪問した。国内調査では、福島県や埼玉県川口市、新宿区高田馬場、神奈川県小田原市のいちょう団地等を訪問し、様々な知見を得ることができた。また教材開発にあたっては、ナラティブ、アート、ドラマ、絵本、地域コミュニティでのかかわりなどに着目し、学習者の情動に働きかける方法論の検討を行った。また、公開研究会を複数開催し、また高校や大学での実践を行うことができた。更に、毎年日本国際理解教育学会で研究成果を報告することで、専門家からの知見の収集に努めた。

4. 研究成果

教材開発のキーワードは「自分ごと」「当事者性」であり、難民問題を、地球の遠いどこかで起こっていること、誰かが解決してくれること、つまり「他人事」の状態から、一歩でも自分(たち)に近づけるための手法を模索してきた。そこでは「きれいごと」を抜きに、まずは「他人事」であることに「気づく」プロセスを大事にし、本音で語り合える関係性の構築も課題になった。特に、難民問題に関心が薄い、あるいはかかわりや経験がないと思っている学習者(教師含む)にとっても取っつきやすい教材の可能性を求めて、本課題ではごく身近なリソースに活路を求めた。具体的には、語り、アート、絵本、地域コミュニティでのかかわりなど、身の回りのリソースを用いて、これまでの難民と市民の「あいだ」を揺さぶることを目指し、当事者性のある学びがいかに成立するのか、その困難さの自覚とともに、方法を検討した。このことは、学習者の認識だけでなく、価値観や情動に働きかけるための国際理解教育の教材、実践について検討することにもつながった。今後は、これらの教材を使った効果の考察、教材の改善なども必要である。

同時に、特に学校教育(小・中・高)において具体的にこうした時事問題、世界的な課題を教育実践として行うことの困難にも突き当たった。様々な事情で学校での難民問題の学習機会は事実上限定的であり、とりわけその必要性や理念を頭では理解できても、いざ実践の受け入れとなると高い壁が存在している。学習者にとって今ここで難民問題を学ぶ必然性があるのか、あるいは、深く入り込みすぎて、情動にアプローチすれば、学習者を傷つけるのではないかという質問もよく頂くことになった。この辺りの課題に関しては、ポーラ

ドをはじめとして、欧州の NGO などの姿勢や実践の積み重ねにも今後学んでいきたい。そもそもいじめや差別、居場所の問題などと「難民性」を照らし合わせれば、日本でもこうした学びが求められている可能性もある。また、学校のみならず、差別や居場所の問題は、社会全体の課題でもある。難民問題学習、ひいては国際理解教育が、こうした現状にどのように働きかけられるのか、引き続き検討していく。

なお、本課題を終えようとする時期にコロナ禍となり、人の自由な移動が制限され、差別が露わになり、人類全ての人々が「当事者」となる事態が起きた。コミュニティや個人の新たな「連帯」の可能性がつかないほど求められている今、地球規模課題と向き合うためのベースとなる国際理解教育のあり方を、引き続き検討していく必要がある。

研究報告書『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』をウェブサイトに掲載した。<https://kokusairikai.wixsite.com/nanminstudy> 関心の向きにはぜひ参照されたい。

なお、報告書は以下の項目からなっている。

第1章 <ことば・からだ・アート>を融合させた難民問題学習へのアプローチ

第2章 難民問題学習とリフレクション

第3章 アート×難民 聖心女子大学公認難民支援団体 SHRET のワークショップから

第4章 難民絵本ワークショップの記録と予備的考察（別表）難民絵本リスト

第5章 難民に関する研究における比較教育学からのアプローチ

第6章 学習者の当事者意識を育てる難民問題学習教材についての一考察

第7章 クルド難民をとりまく川口市

第8章 インドシナ難民をとりまく大和市いちょう団地にみる学びと参加の現状

第9章 沖縄移民に見られる「難民性」から難民問題を自分ごととして考えるための一考察

第10章 難民問題学習の「実践者」としての当事者性

第11章 難民と市民のあいだを学ぶ文学の可能性

資料

ドイツの家での大討論会（ショート）

ドイツの家での大討論会（ロング）

難民キャンプの支援機関オフィスにて

入国管理局の収容施設にて

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 横田和子・佐藤仁美・岩坂泰子・當銘美菜・岡本能里子	4. 巻 -
2. 論文標題 <ことば・からだ・アート>を融合させた難民問題学習へのアプローチ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田和子・佐藤仁美・岩坂泰子・當銘美菜・岡本能里子	4. 巻 -
2. 論文標題 難民問題学習とリフレクション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田和子・佐藤仁美・岩坂泰子・當銘美菜・岡本能里子	4. 巻 -
2. 論文標題 アート×難民 聖心女子大学公認難民支援団体SHRETのワークショップから	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺美奈・當銘美菜・山西優二・前田君江	4. 巻 -
2. 論文標題 難民絵本ワークショップの記録と予備的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山英樹	4. 巻 -
2. 論文標題 難民に関する研究における比較教育学からのアプローチ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山中信幸	4. 巻 -
2. 論文標題 学習者の当事者意識を育てる難民問題学習教材についての一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土田千愛	4. 巻 -
2. 論文標題 クルド難民をとりまく川口市	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 加奈子	4. 巻 -
2. 論文標題 インドシナ難民をとりまく大和市いちょう団地にみる学びと参加の現状	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金城さつき	4. 巻 -
2. 論文標題 沖縄移民の難民性を考える実践報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤仁美・横田和子・岩坂泰子・當銘美菜・岡本能里子	4. 巻 -
2. 論文標題 難民問題学習の「実践者」としての当事者性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田和子	4. 巻 -
2. 論文標題 難民と市民のあいだを学ぶ文学の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『難民問題学習へのアプローチ 国際理解教育に何ができるのか』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 加奈子	4. 巻 1
2. 論文標題 ジェンダー、セクシュアリティとサービラーニング 構成主義的学習観から見る学生たちの学びと地域社会への学生参加の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 桜美林大学サービラーニングセンター 『サービラーニングの実践と研究』	6. 最初と最後の頁 66-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林加奈子	4. 巻 11
2. 論文標題 「開発教育における『共生』概念 コンヴィヴィアリティの視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学文学学術院教育学会『早稲田教育学研究』	6. 最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 仁美	4. 巻 1
2. 論文標題 小学校教員としていじめ問題を深く考えるーアート教育実践研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 目白大学教育研究所「アクティブラーニング事例集2020」	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南雲勇多	4. 巻 204
2. 論文標題 外国につながる子どもと学校のルール・校則	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 エイデル研究所「季刊 教育法」	6. 最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山英樹	4. 巻 24
2. 論文標題 SDGs時代における移民・難民の受け入れの構造と政策	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『国際理解教育』	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Maruyama, H.	4. 巻 -
2. 論文標題 Challenges for immigrants in formal and informal education settings in Japan,	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Global Education Monitoring Report, UNESCO.	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丸山英樹・齋藤有香	4. 巻 1/29
2. 論文標題 国際ネットワーク型学習にみるESD: 学習者のウェルビーイングに資する教育実践 上智大学グローバルコンサーン研究所 (査読有)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『グローバル・コンサーン』	6. 最初と最後の頁 19-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林加奈子	4. 巻 65
2. 論文標題 社会参加概念の捉え直しから再考する開発教育 『学びを生み出す社会参加プロセス』に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 開発教育	6. 最初と最後の頁 92-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩坂泰子 横田和子	4. 巻 17
2. 論文標題 「社会文化的視点による小学校外国語教育の可能性 - 「媒介-手段-を用いて-行為する-個人」を分析する意義-」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関係性の教育学	6. 最初と最後の頁 51-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩坂泰子	4. 巻 18
2. 論文標題 「社会文化理論に基づく児童の語彙学習の分析 - <share>の「意味」と「感覚」 - 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小学校英語教育学	6. 最初と最後の頁 132-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩坂泰子・横田和子	4. 巻 -
2. 論文標題 「『国語科と連携』した小学校外国語教育に関する一考察 - 言語意識教育の視点によることばの学習・発達 - 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『異教科で協働できる教員を育成するための実践的研究(2) 異教科が協働する授業づくりへの「広大モデル」提示を目指して』	6. 最初と最後の頁 95-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横田和子	4. 巻 14
2. 論文標題 小学校国語教育における市民性形成をめぐる場づくりの課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 目白大学人文学研究	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 横田 和子・佐藤仁美・當銘美菜・岩坂泰子・岡本能里子
2. 発表標題 国際理解教育におけるリフレクション(1) 難民問題学習の参加者の語りを手掛かりに)
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤 仁美・横田和子・ 當銘 美菜・ 岩坂泰子・岡本能里子
2. 発表標題 国際理解教育におけるリフレクション(2) 難民問題学習の「実践者」としての当事者性
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩坂泰子・佐藤仁美・横田和子
2. 発表標題 「初等教育における教科教育者「間」の相互行為によるObchynie (教授・学習) の可能性 」
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第6回研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井康子・東奈美子・岩坂泰子
2. 発表標題 図画工作科と外国語活動の教科融合型学習の開発 6年生での絵に表す実践の成果と課題 」
3. 学会等名 第58回大学美術教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井 康子・ 岩坂 泰子 ・ 水城 久美子 ・ 樋口 和美
2. 発表標題 図画工作科と外国語活動の教科融合型学習の開発 - 3年生での絵に表す実践の成果と課題 -
3. 学会等名 第42回美術科教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林 加奈子
2. 発表標題 サービスマーケティングとジェンダー、セクシュアリティ 学び続けることを選択した学生たちが地域コミュニティに与える影響
3. 学会等名 国際ボランティア学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林 加奈子
2. 発表標題 日本の大学におけるサービスマーケティングの現状と課題 『市民性』の視点から
3. 学会等名 早稲田大学文学学術院教育学会夏季研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 加奈子
2. 発表標題 開発教育における『共生』概念の再検討 コンヴィヴィアリティの視点からー
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林加奈子・土田千愛・山西優二
2. 発表標題 難民をとりまく地域コミュニティにみる学びと参加
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸山英樹
2. 発表標題 「ポスト真実」時代における人間形成：ノンフォーマル教育からのアプローチ
3. 学会等名 日本教育社会学会 第 70 回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸山英樹
2. 発表標題 移民・難民の受け入れに伴うノンフォーマル教育の機会 - ドイツのNGOキロン・オンライン高等教育も参考に -、
3. 学会等名 日本比較教育学会第54回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸山英樹
2. 発表標題 ノンフォーマル教育からみた難民受け入れの課題
3. 学会等名 第三世界の教育研究会 5月例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤仁美 横田和子 岩坂泰子 岡本能里子 當銘美菜
2. 発表標題 <ことば・からだ・アート>による難民問題学習へのアプローチ(1) 国際理解教育におけるドラマワークと協働アートワークの実践から
3. 学会等名 日本国際理解教育学会第28回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横田和子 佐藤仁美 岩坂泰子 岡本能里子 當銘美菜
2. 発表標題 <ことば・からだ・アート>による難民問題学習へのアプローチ(2)－国際理解教育で育む能力の再考
3. 学会等名 日本国際理解教育学会第28回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横田和子
2. 発表標題 難民と市民の「あいだ」を学ぶ国語教育実践を構想する
3. 学会等名 第135回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横田和子 佐藤仁美 岩坂泰子 岡本能里子 當銘美菜
2. 発表標題 情動レベルに働きかける市民性教育の実践に向けて ことば・からだ・アートを融合させた難民問題へのアプローチ
3. 学会等名 言語文化教育研究学会第5回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横田和子
2. 発表標題 「小学校国語教育における『ことばの市民』形成の場づくりの可能性」
3. 学会等名 日本言語政策学会第19回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横田和子
2. 発表標題 「国語教育と複言語複文化主義 『声の多様性』からデザインする学びの可能性」
3. 学会等名 第133回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横田和子
2. 発表標題 「多言語多文化教材としての『にほんご』（1979）の可能性」
3. 学会等名 日本国際理解教育学会 第 27回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林加奈子
2. 発表標題 国際理解教育・開発教育におけるふりかえりの再考 参加型ワークショップ教材におけるふりかえりを取り上げて
3. 学会等名 日本国際理解教育学会 第 27回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林加奈子
2. 発表標題 The way to "Be the change"- Japanese students meet a new world-
3. 学会等名 University Community Engagement Conference
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡本能里子
2. 発表標題 「メディアとしての教科書・教材を考える」
3. 学会等名 日本言語政策学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Okamoto Noriko
2. 発表標題 “Memory” of Hiroshima: Reconstructed New nuclear Stories by multimodal media discourse
3. 学会等名 The 15th International Pragmatic Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Okamoto Noriko
2. 発表標題 How to construct “memory”: stories of the nuclear events from Hiroshima to Fukushima
3. 学会等名 Belfast Waterfront Center (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 南雲勇多	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 151-173
3. 書名 「平和を創る主体の育成：埼玉県蕨駅周辺での『フィールドを歩く』行為を通して」金敬黙編『越境する平和学 アジアにおける共生と和解』	

1. 著者名 丸山英樹	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 204
3. 書名 「移民と社会を橋渡しするドイツのNPO」(pp.163-187) 『移動する人々と国民国家 ポスト・グローバル化時代における市民社会の変容』	

1. 著者名 丸山英樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 883
3. 書名 「ノンフォーマル教育」日本教育社会学会編(pp.532-533) 『教育社会学事典』	

1. 著者名 岩坂泰子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 『教師と人権教育 公正, 多様性, グローバルな連帯のために - 』(女性と人権第5章 翻訳担当)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	丸山 英樹 (MARUYAMA Hideki) (10353377)	上智大学・グローバル教育センター・准教授 (32621)	
研究分担者	山西 優二 (YAMANISHI Yuji) (50210498)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	

6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 仁美 (SATO Hitomi) (70584291)	目白大学・人間学部・専任講師 (32414)	
研究分担者	小関 一也 (OSEKI Kazuya) (80267434)	常磐大学・人間科学部・准教授 (32103)	
研究分担者	岩坂 泰子 (IWASAKA Yasuko) (80636449)	広島大学・教育学研究科・准教授 (15401)	
研究分担者	林 加奈子 (HAYASHI Kanako) (90458737)	桜美林大学・心理・教育学系・講師 (32605)	
研究分担者	山中 信幸 (YAMANAKA Nobuyuki) (90758533)	川崎医療福祉大学・医療技術学部・教授 (35309)	
研究分担者	南雲 勇多 (NAGUMO Yuta) (00781543)	東日本国際大学・経済経営学部・特任講師 (31604)	